西淀病院と医療人をつなぐコミュニケーション誌

よどコミュ！

Vol.5

2019.8

特 集

2. 西淀病院の初期後期研修 そして現在

CONTENTS

6. キラリ★西淀人　**8.** JOYS（女医ズ！）　**9.** I Love Patient
10. ズバリ！西よど　**11.** シリーズ職場REPORT

民医連

特集

西淀病院の初期研修後期研修そして現在

大谷紗代 医師

2011年 香川大学卒業

喫煙防止教室

スワンスワン

大谷先生と、わたしたち民医連の出会いは、2004年の高校生１日医師体験でした。医学生になってからは、民医連の奨学生として、本来の医学の勉強にくわえ、民医連医療の学びを深めてきました。初期研修を大阪の西淀病院・耳原総合病院で、その後、ファミリークリニックなごみをホームとした大阪民医連家庭医療センターの専攻医として後期研修を修了し、2018年に「家庭医」となりました。継続して、西淀病院にかかわってきた大谷先生の視点から、出発点から現在まで、そしてこれから出会う人へのメッセージもふくめて、お話しいただきました。

1 西淀病院の初期研修から後期研修にかけて

民医連を知ったきっかけは「高校生１日医師体験」という取り組みで高校２年の春に西淀病院を訪れたことでした。そのことを契機に、大学に入ってから大阪民医連の奨学生になり、民医連医療を知り、全国の仲間とも出会いました。

西淀病院で初期研修を始めようと思ったのは、高校生１日医師体験や大学時代の実習で、職員の皆さん、地域の方々のアットホームな雰囲気、地域を守る姿勢に共感したことがきっかけでした。

研修医になった当初は漠然と「患者さんの日常から関わり、笑顔にする手助けが出来る医師になりたい」と考えており、専門科は特に決めていませんでした。その想いを胸に初期２年間を過ごし、どの科の先生も素敵で、悩みましたが、最初に関わって頂いた先生方が、家庭医の先生が多かったこと、また「人」が好きだったので、臓器別ではなく、子どもにも大人にも、全人的に関わりたかったこと、どんな悩みや問題でも、最初に相談できる気軽な存在でいたかったことから、家庭医療（総合診療）の道に進むことを決心しました。

2 ファミリークリニックなごみと家庭医

当院の家庭医プログラム（現・総合診療プログラム）は、後期研修を通して、一人の患者さんを長期的に担当していくために、担当の診療所を決め、他科のローテート研修をしていても、必ず週１回はその診療所の研修（午前：外来、午後：訪問診療）を実施するプログラムになっています。初期研修では一人の患者さんを、年単位で担当する経験はなく、また高血圧などの慢性疾患を定期管理していく経験は、ほぼ無かったので大きな魅力の一つと思っています。

私が担当になった診療所は、大阪市淀川区加島にあるファミリークリニックなごみという診療所で、医師以外は女性職員のみですが、頼りになるパワフルな皆さんに支えられながら、多くの患者さんやご家族、地域を支える職員の方々に出会いました。

往診に出発

診療所研修では、さっきまで90代の方を診察していたと思えば、次は０歳児の赤ちゃんを診察するなど、バリエーションに富む外来に最初は戸惑いもありましたが、こんな外来が出来るのは家庭医冥利に尽きると思いつつ、診療に臨みました。訪問診療では外来では見ることが出来ない、お宅に伺わなければ気付けない患者さんの生活背景を知ることが出来ました。

病院での入院や診療所の外来と違って、ご自宅は患者さんにとっての「城」・「ホーム」であり、こちらがお招き頂いているような形なので、家だからこそ見える患者さんたちのリラックスした素顔も知ることができました。

訪問診療は時には臨時往診といって、体調が急に悪くなった方やこれまで医療機関につながっていなかった方を、地域の方や行政の職員に紹介され、診療に行くことも日常茶飯事です。そのときに頼ってもらえる存在であることは研修をしていくなかで誇りとなりました。そうしてたくさんの方々に家庭医として育てて頂いたと実感しています。

3 ATBチームと喫煙防止教室

西淀病院には禁煙について様々な活動に取り組む多職種で構成された『ATB(あかん　たばこ　ぼくめつ)』というチームがあります。私も家庭医の後期研修をするなかで禁煙外来も担っていましたので、タバコにまつわる取り組みには興味がありました。同じ家庭医の先輩である野口先生にもお声かけいただき、私もこのチームの一員となって禁煙外来の推進や病院周囲の吸い殻拾い（スワンスワン活動）、地域の小学校に出向いて行う喫煙防止教室の取り組みに積極的に関わるようになりました。

喫煙防止教室についてですが、2012年から開始した活動で西淀川区や淀川区の小学校にスタッフと出向き、タバコの害についての講義と喫煙に誘われたときの断り方をロールプレイで練習する授業内容で小学校高学年の方々を対象に実施しています。徐々に開催校数も増え、昨年度は西淀川区の小学校14校のうち、10校の開催となりました。この活動は西淀川区から委託されており、我々だけでなく行政も巻き込んだ取り組みとなっています。今後はこの教室を通して、子どもたちに喫煙しない大人になってほしいと共に大人にも浸透して地域の喫煙率の低下につながればいいなと思っています。

新患カンファレンス

診察中

4 HPH国際カンファレンス

HPHとはHealth Promoting Hospitals ＆ Health Servicesの略で健康増進活動拠点病院のことです。治療だけでなく、患者さんや地域の方々、また病院の職員も含めて健康づくりも重視していこうという取り組みです。現在、世界中にこのHPH活動に取り組んでいる病院や組織があり、お互いの活動を年に1回報告する会として、HPH国際カンファレンスがあります。

私は2018年6月にイタリアのボローニャでの第26回HPH国際カンファレンスに参加し、前述のATBと喫煙防止教室の取り組みについてポスター発表をさせて頂きました。国際学会ではありますが、参加国としてはアジア圏が多く、特に台湾は国をあげてHPH活動に取り組まれていて活気を感じました。

国の文化や国民性によってそれぞれの特色が表れていることもあれば、国は関係なく同じように悩み、切磋琢磨している様子が伺えました。今後のHPH活動のモチベーションになりましたし、我々の活動が世界規模でみればどのレベルにあるのかも知ることができ、大変学び多いカンファレンスでした。

診察室

5 日常的にSDHを感じること

民医連は『無差別平等の医療』を掲げ、私もその医療に共感し、さまざまな困難を抱える方々を支えたいと想いながら日々働いています。『困難』の中には医療機関へのアクセスの問題や経済状況、生活環境など様々なものがあります。健康はそういった『困難』から影響を受けますが、世界的にも健康と様々な社会的因子との関連性の研究が近年進んでおり、WHOからも『健康の社会的決定要因(Social Determinants of Health:SDH)』として重要性が報告されています。

私が日々診療をするなかでよくSDHを意識する機会が多いのは貧困や社会的支援の困難さを抱えた方々です。年齢に関わらず、経済的困難を抱えている方は医療機関の受診を控える印象です。「病院にかかるお金がない」「保険がない」「休むと仕事が無くなるので受診できない」等の理由で受診を控え、動けなくなったり、重症になってやっと病院に来られる方も大勢いらっしゃいます。確かに医療費は高い印象ですが、『無料低額診療制度』や様々な制度を利用して経済状況に応じて負担を軽く出来る場合もありますし、医療ソーシャルワーカーという生活状況の相談に乗る職員もいます。私もこうした困難を抱えた方に出会ったときは、ただ診療を終わらせるだけでなく、今後も安心して医療にかかっていただけるように様々なスタッフと協力しながらサポートに繋げるように心がけています。また重症になる前に早期に受診することで総合的に医療費もかからずに済むこともありますので、健康問題で不安があれば早めにご相談ください。

今よどコミュを読んでくれている あなたへ、メッセージ

私が専門としている「家庭医」「総合診療医」という分野は、様々な働き方ができることも魅力の一つと思っています。診療所で働く医師もいれば、病院で働く医師もいて、またいずれのセッティングでも後輩の教育に携わる機会も多いです。

私も後期研修医時代から初期研修医の指導に関わっており、今年度も西淀病院の初期研修医の先生2名の指導をしています。医師としてもまた社会人としてもデビューとなることが多い方の始まりに関わらせていただくのは毎年緊張するものですが、この西淀病院でスタートした先生たちが、医師としてはもちろんのこと、人間的にも着実に成長していく様子は頼もしく、本当に嬉しい限りです。当院での研修は「一人にしない」ことをモットーにたくさんのスタッフが関わって下さるアットホームでのびのびとその人らしさを活かした研修ができると思っています。

また、家庭医としては病院でも診療所でも多職種連携に深く関わることも多いです。それぞれの職種が自身のプロフェッショナリズムを発揮できるように円滑にマネジメントする役割も私たちの専門分野ではないかと思っています。そうした部分も当院では感じ取っていただけるかと思いますし、このよどコミュをご覧いただいている方で、もし当院の様子を見てみたいなという医系学生さんや医療従事者の方がいらっしゃいましたら、是非見学にいらしてください。

6 外部研修はじまりました

2019年1月～3月で関西医科大学附属病院の心療内科で研修をさせて頂きました。日頃、初期対応をすることが多い中で、様々な症状を訴えられる患者さんに出会います。一般的な検査では何も異常がないけれども、症状に困っている患者さんに、ただ話を聞く位しか出来ない自分に歯がゆさを持っていました。身体面と精神面が複雑に絡み合っている患者さんも多く、双方の関係性やそれぞれに対してのアプローチの力をもう少し強化したいという思いもありました。

同大学の心療内科で先に研修をされていた先輩に話を聞く中で、私のモヤモヤした思いを解決してくれるのは心療内科での研修だ！と感じ、依頼をしました。関西医科大学の心療内科は内科医師で構成されており、総合診療科として外来を担当されている先生も多くいらっしゃいます。私は主に心療内科の入院患者さんを担当させて頂きましたが、心理士の先生とチームを組んで、心理面からも専門的にアプローチできるシステムになっていました。

研修を実際に経験してみて、心療内科と総合診療に共通している点が想像以上にあることを実感しました。いずれも身体面－心理面－社会面の関りを意識して診療し、症状の解決を目指します。治療もただ単純にお薬を処方するだけではなく、周囲の人との関わりや運動を促すなど、薬以外の方法も治療の一環として提案しています。この3か月間ではただ単に心療内科としてのスキルを学ぶだけでなく、『寄り添う』ということはどういうことなのかを改めて学ばせていただいた貴重な時間になりました。

西淀病院に戻ってから、患者さんへの向き合い方、話の聞き方が少し変化してきたと感じています。心療内科の先生方のように専門的なアプローチはまだまだですが、少しでもそのエッセンスを活かせるように、今後の診療に臨みたいと思っています。

7 大切にしたい「笑う」こと

大阪ということもありますが、「笑う」ことは大切にしたいと思っています。診療の中で何気ない会話から生まれる患者さんたちの笑顔が大好きです。医師8年目とまだまだ未熟ではありますが、冒頭で記載した「笑顔にする手助けの出来る医師」を目標にこれからも患者さん、ご家族、地域を医師としてサポートしていきたいと思います。

診察場

キラリ西淀人 vol.05

大森　京子

西淀病院　内科医師
1970年 鹿児島大学卒業

第５回は、大森京子先生です。70歳を超えてなお現場で活躍中。
西淀病院との出会いから現在までをお聞きしました。

私と西淀病院の出会い

私が西淀病院に初めて訪れた時、医学部卒業後既に33年が経過していました。それまでは大学で基礎医学（生化学、薬理学）の研究、教育に従事していましたが、医師としての最終章を迎えるにあたり最後は“人のそばにいたい”という気持ちがだんだん強くなり、卒後１年以後遠ざかっていた臨床医学の道に入りたいとの思いで西淀病院での研修を希望したのです。

何故西淀病院かというと、日本でも有数の公害の街、西淀川地区にあって、患者さんの為の診療を貫いていた姿を見ていたからです。私の卒後１年目は、インターン闘争の直後で研修医制度が導入されたものの、この制度では卒後すぐに単一の専門の科に属して研修し、賃金も低いなどおよそ理想からはかけ離れた条件を受け入れなければならないものでした。鹿児島大学の私のクラスはこの新研修医制度をボイコットし自主カリキュラムでいくつかの科をローテイト研修し、そのうちの３カ月間はアルバイトをして生活費を稼ぐという道を選びました。このアルバイト先の宮崎県の片田舎の病院で出会った先生が、沓脱タケ子先生の友人で、この先生にお願いして西淀病院につなげていただいたのです。

この時すでにお二人とも第一線を引いておられましたが、恵まれない人々の医療と生活の改善、更に平和のために精一杯尽力された老先生方にお世話になったことを深く心にとめて今でも胸が熱くなります。

西淀病院ではじめた臨床研修

この私の超遅ればせの臨床研修はどう見ても無謀なものと映ったようで、初めての面接に立ち会って下さった研修医指導担当の福島先生は、ご自分のお母様と年齢の近い研修医の指導に戸惑いを感じられたと、後ほどにぼそっと言われたり、その時病院長だった大野先生には、記憶力は大丈夫かとからかわれたり、医局事務課長だった坂田現事務長も不安げにメモを取っておられたことを思い出します。

しかし、研修が始まるとどの先生方も、他の研修医と同様に丁寧に指導して下さり、おかげで充実した研修を受けることができ、西淀病院の懐の深さと先生方の他では見られない幅広い臨床能力の高さを実感しました。

今感じること

臨床研修開始後16年目でまだまだ未熟で学ぶべきことが多いですが、70歳を超える高齢に達し、第一線の診療から離れて主に循環器系疾患を中心とした慢性疾患の管理を、外来および往診を通じてやらせていただいます。

更に、昨年４月からは老人保健施設よどの里の訪問リハビリテーション往診にも加わり、患者さんをより生活に近いところで看る機会が増えています。患者さんは、私と一緒に年を重ねたような方も多く、高齢でもその技術を生かして働いておられ、体力に見合わぬストレスからうつ傾向になったり、血圧やコレステロールが上昇したりされていますので、治療しながら生き生きと仕事を続けられるよう、寝たきりの親や配偶者の介護をぎりぎりの体調でやっておられる方には介護を少しでも楽に続けられるようになど、願ってサポートしています。

しかし、こんな中で、生活保護や無定額診療で医療費は一応充足していても、大変な経済的困難を抱えて食事にも困っておられる方や、障害があるため働きたくとも働けず生活保護に甘んじていると卑屈になっている方などなかなか心の健康を取り戻せぬ方々がおられ、医療だけでは解決できない問題に直面することも多いです。

社会医学研究所の中村先生も翻訳に関わっておられる、マイケル・マーモット氏の著書「健康格差」によると、ある程度の経済力（医療費が払えるぐらいの）までは、所得と平均寿命は相関するが、それを超すと“健康格差”は様々な社会的不平等に影響され、個々が生きがいのある人生を自由に選びとって生きられる環境にあるか否かに関連するとのことです。健康格差をなくすのに社会はどう変わっていけば良いのか？そんなことを考え、話し合う基盤が西淀病院にはあると考えています。

JOYS! 女医ズ★

日本一女性医師が働きやすい病院を目指して

女性医師に聞く!

2005年 香川大学卒業。総合内科専門医。夫、５歳と２歳の娘の支えもあって頑張れる日々です。

大池 実衣子医師

おいたちと両親の教え

私の両親は時代を先行く、晩婚、高齢出産で、第一子の私は母が33歳の時にうまれました。母は養護学校の教師でしたが、結婚を機に退職し、父たち家族が営む鉄工所を一緒に切り盛りしていました。工場の上に我が家はあり、私は両親の働く姿を見て育ちました。母は忙しく働き、化粧っ気もなく、若くもなく、凝った料理や掃除も得意ではありませんでしたが、「料理よりも掃除よりも、一緒に工場で働いてくれるお母さんのことが大好きだ！」と父は一貫していました。

そんな両親に「女でも、経済的精神的に自立すること」と教えられ育った私は、医師をしながら、結婚し子育てをしているこの現状を、当たり前のように思い描いていました。

働くママの今

子育ても、仕事も完璧ではないことは当たり前とわかっていても、やはり肩身は狭く感じます。仕事は子どもが生まれる前と同じようにはできず、早く帰る時も「すみません」と謝り、仕事でお迎えが遅くなると「本当に仕事で遅くなったんですよね？」と保育の先生から釘を刺され、ほんの少しの休憩時間も許されないのか？と涙が出そうになったことも。そして、添い寝をしてる子どもに「あまり相手をしてあげられずごめんね」と謝り。働く母の姿を見、それを肯定してきた私でも、申し訳ないという気持ちが日々湧いてくる状況です。それでも、元気な子どもたちと、理解ある夫や職場の仲間に支えられ、頑張れています。

ある日の出来事、子どもが求めるママとは？

夫は料理が得意で、毎日ご飯をつくってくれます。そんな夫にある日、長女が「パパって、ご飯しか作られへんよな」(ご飯作りしかできないの意)と言いました。「じゃあ、ママは何ができると思う？」と聞くと、長女ははっとした表情で私をみつめ、しばらく考え抜いた結果、満面の笑みで「ママ、歯磨きできるやん」と言いました。ホッと安堵した長女の顔にははっきりと「よかった。できることが見つかって」と書いていました。

「こらー！ママはな、いっぱい仕事してる、ほら、掃除もしてるし保育所にも…」と、必死でフォローする夫の声が遙か遠くで聞こえる気がしました。忙しい日々も、子どもたちのためなら、と少なからず思っていた私にはショックでした。でも、大事なことです。母がどれほど仕事を頑張っても、子どもからは評価されないのです。(ちなみに家事の中でも、炊事以外は価値が低いこともわかりました)そんなことよりも、「一緒にパズルしたり、塗り絵をしたり、一緒にいたいときにいてくれるママがいい！」のですよね。

そのことをしっかり心に留めて、仕事と塗り絵とパズルの両立を頑張ろう！と、今年の抱負が決まりました。

仕事と家庭と私

そして、仕事は続けます。それは、収入が得られるからだけではなく、仕事をすること、社会参加する事で、どれほど母の人生が豊かになっているかを子どもたちに伝えたいと思うからです。もちろん、子どもたち家族との時間も、とてもかけがえのない宝物であるとしっかり伝え、一緒にいる時間も大事に。

そんな母をみてもらい、子どもたちが自分の人生をどう歩みたいかを考え進んでもらえたら嬉しいです。

I Love Patient Vol.05

チームで取り組むベスト・サポーティブ・ケア

西淀病院の緩和ケアについて

総合外来師長　がん性疼痛看護認定看護師　松浦由喜（青い服が筆者）

西淀病院の緩和ケアチーム

看護師になってから病棟で18年勤務し、多くの患者様との出会いがありました。がんの診断／告知・再発・治療・ベストサポーティブケア（以下BSC）と様々な段階の患者様がおられます。診断／告知・治療の経過を知っている患者様もいれば、他院で告知／診断・治療されBSCとなり当院に来られる患者様もいます。

最期を病院で迎えた方も少なくありません。「家に帰りたいけど…家族に迷惑がかかる…」、「痛い…苦しい…今は家に帰るのは無理」など自分の気持ちと様々な事情・状態で葛藤されている方もおられます。関わる期間や患者様の状態は様々ですが、気がかり・希望・価値観などを知り、タイミング逃さずチームで関わることが鍵だと感じています。

当院の緩和ケア・がん化学療法委員会では、月１回定例会議と、隔月で事例検討会と学習会を行っています。事例検討会では、病院の看護師だけでなく薬剤師・リハビリスタッフ・時にはこれまで関りのあった診療所看護師やケアマネージャーも参加し、様々な情報共有をします。その中で出会った事例を紹介します。

患者さまの願いによりそう

事例　70歳代の女性。食思低下・倦怠感・下肢浮腫の精査で入院されました。家族は、ご主人（肺がん、化学療法中）、息子様１人、ご家族で飲食店経営。精査の結果、腎がん、肺転移と診断され、BSCの方針となりました。

酸素投与が開始され、徐々にADLは低下し、車いすに介助で座るのがやっとで、長時間の車いす座位は困難な状態、食欲低下のため食事摂取はほとんどできず少し飲水ができる程度でした。

入院中に家族で経営していた飲食店を閉めることになりました一度自宅に帰りたいという気持ちを知り、閉店日に、医師（主治医）と看護師２人が付き添い、酸素ボンベをもって自宅へ外出しました。病院ではほとんど食べることの出来なかった患者様でしたが、夫がよく妻に作っていた食事を作ってくれると摂取でき、自分で飲水しようとコップを持つ動作もみられました。その後、状態が悪化し外出後10日あまりで永眠されましたが、食事摂取できた驚きとご本人とご家族の素敵な笑顔が忘れられません。

「どう生きるか」希望を支えられる関わりを

患者様の気がかり・希望・価値観などを知ること、知ろう・聴こうとする関わりがケアの第一歩。そこから信頼関係が深まります。無理ではなく、どうしたら叶えられるか。チームで意見や知恵を出し合うことを大切にしています。どのように最期を迎えるかではなく、どう生きるか。穏やかな気持ちで過ごせる時間が少しでも増えるよう、生きる希望を支えられる関わりができたらと思います。「生きる希望を支えた」思い出は、家族の支えにもなると実感しています。

ズバリ！

西よど

1. 西淀病院

病院や地域など様々なフィールドで、医師やコメディカルスタッフが活躍してます！

24時間救急

当院は24時間体制で救急搬送を受け入れており、必要時には複数の医師が診療に当たらせていただきます。

チーム医療

それぞれの分野の専門家が、情報や技術を交換し合い、横の連携を最大限に生かした医療を行います

無料低額診療

月の収入に応じて、原則1ヶ月間、窓口負担を割り引く、または無料にする制度が利用できます。

快適な環境

清潔感のある施設で、時間外でも断らずに診療させていただきます。また施設内は全面禁煙です。

差額ベッド

当院では、差額ベッド料はいただいておりません。患者さんの病状に応じて病室を決めております。

地域医療

地域の開業医や病院と適切に連携し、地域の患者さんに安心して最適な医療を受けていただきます。

西淀病院は5つの診療所、1ヵ所の老人保健施設、介護サービス事業所、訪問看護ステーション、デイサービス施設を有し、「予防から介護まで」幅広く地域に密着したネットワークで、安心して住み続けられる地域包括ケアシステムを進めていきます。

健康で住みやすい町づくり活動として、サークル、ボランティア、旅行などを計画しています。

シリーズ職場REPORT

第5回　健診課

地域のみなさまの健康のために

健診課ってこんなところ

健診課は現在事務8名、臨床検査技師1名のスタッフがおります。業務内容は、健診の予約入力や受診していただく準備、健診キットの送付、受診時の受付から計測、各検査部署への送り出し、受診後は一部医師の判定したものの代行入力、判定結果がそろっているか確認して結果送付。診断結果によっては受診を促す連絡を入れるなどを行っています。

健診の種類は多岐に渡り、保険者や自治体の健康診断（がん検診や特定健診）、事業所からお申し込みのある健診、半日人間ドック、特殊健診などがあり、地域の方や、周辺事業所の方など年間で1万人以上の方が受診しています。

また、法人の職員健診も大半を請け負っています。職員採用時の健診も行います。法人内や大阪民医連の診療所ではできない検診を委託して行ってもいます。

健診は主に午前中に行い、午後の時間はほとんどが事務処理を行っています。電話でのお申し込みが主なため、電話回線が1日ふさがることも多くあります。

世間がお休みの時に健診を受けられる方も多いため、平日より土曜日が忙しかったりもします。

また、毎月1回日曜健診を行って、平日に受診できない方も受け入れています。

一般の診療と異なり健康な方が来られる部署のため、できる限り待合も検査や診察とは異なった場所で行えるように配慮しています。

健診とチーム連携

健診は、健診課だけではできません。医師はもちろん、外来の看護師、検査科や放射線科、婦人科や外科にも協力して頂いて行っています。

各部門で問題や疑問、相談しなければいけないことが起こった場合は、すぐに報告し、受診者様に迷惑のかからないよう、双方が気持ちよく業務をこなせるよう話しています。

いろいろな健診

健診コースはかなりたくさんあります。特定健診だけでも、保険者によって内容、金額に差があります。友の会（地域の共同組織）会員専用コースもありますし、人間ドックのコースも複数あります。契約企業と私たちが呼んでいるとりまとめ機関を通しての健診もあります。

申し込みいただく際、受診者様が理解されていないことも少なくありません。その都度ファイルを確認するなどして予約しますが、細かい違いも多く、覚えることは難しいです。

そんな中でも、受診者様が希望される健診を受けられるよう、間違いのないよう注意しています。

毎年年度末には特定健診の受診希望の方が駆け込みで来られます。希望にそえるように枠をひろげて受け入れるなど、地域の皆さんの健康維持にもつながることとして頑張っています。

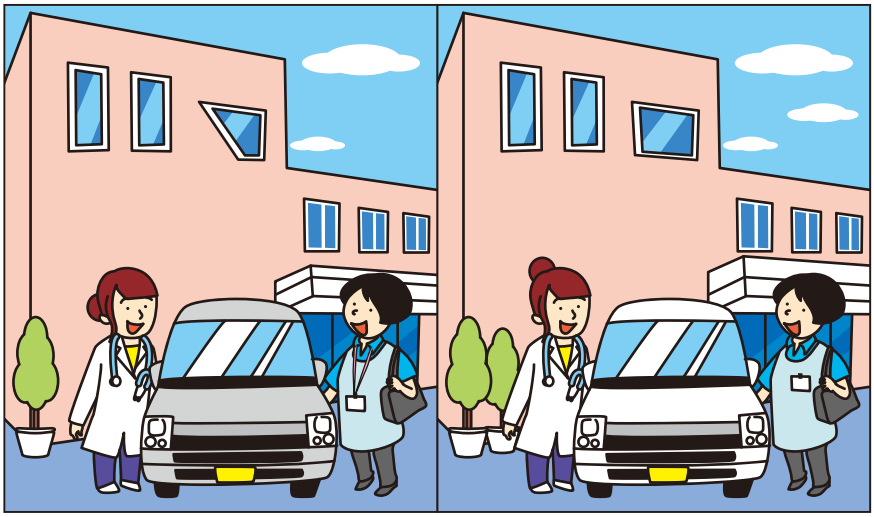
クイズ

7つのまちがいさがし

正解者の中から抽選で5名に図書カードを進呈します。
（但し医師・看護師及び医系学生の方に限ります）

締切日：2020年2月末到着分

はがき又はE-mailで答えを送ってください。
・クイズの答え
・氏名・職種・職場名又は学校名
・住所・電話番号・E-mail
E-mail：igakusei@yodokyo.or.jp
郵送：〒555-0024 大阪市西淀川区野里3-5-22
西淀病院医局事務課 よどコミュ担当 宛



研修医・医師・看護師募集中！

病院見学・実習随時可能。お問い合わせください。

公益財団法人 淀川勤労者厚生協会 **西淀病院**
〒555-0024 大阪市西淀川区野里3-5-22
TEL：**06-6472-1141**（代表）
医師／看護師採用担当までご連絡ください。

編集後記

2015年に誕生した西淀病院広報誌「よどコミュ！」は5歳になりました。医学生、研修医や専攻医、西淀病院とつながりある先生がたへ、西淀病院の「いま」をお届けできるように、医局スタッフで作っています。

今回は、高校1年生のときからつながっていた若手医師の特集でした。記事を読みながら、あの場面この場面、とそのときどきの出来事が想いだされ、懐かしく思うのと同時に、本当に頼もしく、今いっしょの場ではたらいていることを、うれしく思います。

あらためて私たちの医療機関は〝人間をみる〟医療機関なのだなと、しみじみ感じました。これまで地域医療を推し進めてきた私たちの歴史に、また新たな未来が続いていくことでしょう。

もうひとつ。働き方改革を着実に進めて、女性をはじめとした労働時間に制限のある人が、そうでない人と同等に活躍することができて、評価もされる職場と社会を作りたいと思いました。

つながりと新しい出会いへ想いをこめて、これからも「よどコミュ！」をよろしくお願いいたします。

淀川勤労者厚生協会西淀病院

救急指定病院　基幹型臨床研修指定病院

大阪市西淀川区野里3-5-22　TEL：06-6472-1141

診療科目
内科（呼吸器、循環器、消化器、神経、糖尿病・代謝）
外科・整形外科・婦人科・泌尿器科・放射線科・
小児科・リハビリテーション科・血液浄化室（人工透析）

総ベッド数：218床
一般病棟：108床
回復期リハビリテーション病棟：56床
地域包括ケア病棟：54床
血液浄化室（人工透析）：25床

表紙：大谷紗代医師（家庭医療専門医）

よどコミュ！
西淀病院広報誌「よどコミュ！」
Vol.5　2019年8月1日発行
公益財団法人 淀川勤労者厚生協会 西淀病院 〒555-0024 大阪市西淀川区野里3-5-22 TEL 06-6472-1141 URL http://nishiyodo.org/